

日本語プログラムの実践：「日本語専門基礎」を中心に

齋藤伸子・池田智子

キーワード：留学生、学群留学生、日本語専門基礎、初年次教育

概要

桜美林大学には、大きく分けて4種類の留学生がいる。大学1年生として入学した留学生、海外の提携校から半年または1年間のみ来日するRJ(交換)留学生、大学院に在籍する留学生、日本言語文化学院(留学生別科)に在籍する留学生である。日本語レベルは、未習者から上級者までさまざまであるが、本稿では、このうち主に大学1年生として入学した留学生(以下、学群留学生)を対象とする科目「日本語専門基礎」を紹介する。「日本語専門基礎」は「日本語専門基礎 AI」「日本語専門基礎 AII」「日本語専門基礎 B」の3科目から成り、学群留学生の1年次のコア科目である。「日本語専門基礎」の3科目では、大学生として必要とされる「読む・書く・話す・聞く」力をつけることができるよう、学群授業で学生が実際にこなさなくてはならない課題や授業の困難点を洗い出し、それに対応する目標を立てて授業を行っている。また、日本語プログラムでは「日本語専門基礎」以外にも多くの日本語選択科目やリソースを提供している。全学の留学生や日本語を母語としない学生のニーズを把握し、適切な支援を行える組織の重要性は今後も変わらないであろう。

1. 本学における第二言語としての日本語教育

語学を身につけた国際的人材の育成を建学の精神の柱として掲げる桜美林大学では、多くの留学生が学んでおり、2015年5月現在、本学に在籍する留学生は以下の内訳になっている。

表1 2015年5月現在の留学生数

正規留学生(学群生)	226名
正規留学生(大学院生)	129名
RJ(交換)留学生	146名
日本語文化学院(留学生別科)留学生	84名
計	585名

これらのうち、主に学群留学生とRJ(交換)留学生が基盤教育院外国語教育部門の日本語プログラムで日本語を学んでいるⁱ。日本語プログラムの開講科目は、以下のような構成となっている。

表2 日本語科目の構成

科目	対象	内容
日本語専門基礎 A I、A II、B	学群留学生	留学生が学群の科目を履修して単位を取るために必要なスキルと、自律的な学習者になるための方法を学ぶ。1年次相当のコア科目。春秋計10単位必修。
日本語I～V ⁱⁱ	RJ留学生	入門から上級まで9レベルに分かれ、「読む・書く・聞く・話す」の四技能を総合的に学習する。基本的に必修扱い。レベルにより2～6単位。
日本語演習	学群およびRJ留学生	特定の分野を強化したり弱点を補強したり、興味のある分野を学んだりするための科目。すべての留学生が自分に合ったレベルの科目を選択することができる。各1単位。

(齋藤・池田・ミグリアーチ 2014 より転載)

本稿では、上記のうち、留学生など日本語を母語としない学生の初年次教育に深くかかわる「日本語専門基礎」について述べ、その意義を考えることとする。

2. 留学生のコア科目としての「日本語専門基礎」

「日本語専門基礎」は1年次の学群留学生(各学群に1年生として入学した学士課程の学生)のための必修科目である。留学生が日本語で大学の授業を受け、単位を取得し、卒業するために必要な日本語力を身につけることを目的として設置された。学群留学生の人数は2015年5月現在で226名であり、このうち1年生が英語コアおよび「文章表現法I」に代わる必修科目として「日本語専門基礎」を年間10単位履修している。

「日本語専門基礎」は「日本語専門基礎 AI」「日本語専門基礎 AII」「日本語専門基礎 B」

の3科目から成っている。以下にそれぞれの科目で扱う主な内容を示す。

表3 「日本語専門基礎」構成と主な内容

※「コマ」は各学期、週当たりの数

科目名	コマ	主な学習内容
日本語専門基礎 AI	2	・書き言葉 ・パラグラフライティング ・レポート作成の方法
日本語専門基礎 AII	2	・論説文の読解・ニュースの聴解・新聞記事の読解 ・意見交換・講義の聴解 ・ノートテイキング ・文法、語彙
日本語専門基礎 B	1	・自分で日本語学習を管理する能力 ・個別の弱点強化

3. 大学での勉学に必要な CALP の獲得

日本に滞在する留学生にとって日本語は第二言語であり、彼らは二言語使用（バイリンガル）の状態にあるといえる。Cummins (1984) は、バイリンガリズムにおける言語能力を、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills)：伝達言語能力と CALP (Cognitive Academic Language Proficiency)：学習言語能力に分けてとらえる。大学で講義を聞いた資料を読んだりレポートを書いたりする活動には、CALP が必要である。母語の CALP は中等教育段階から育っていくが、入学時の日本語能力が BICS に留まる多くの留学生にとって、第二言語である日本語の CALP は大学に入学してから獲得しなければならないものである。しかし、大学では初年次から CALP が必要とされるため、留学生は言語面で非常に厳しい状況におかれる。

入学後少ししてから学群留学生に困っていることはないかと尋ねると、多くの学生が「講義が聞き取れない」と答える。日本語能力試験の N2 以上に合格し、日常会話はほぼ不自由しないと自覚する多くの学群留学生にとって、それは衝撃的な事実であろう。「日本語専門基礎」の役割は、そのような留学生に早く CALP を獲得させることにある。そのために、「日本語専門基礎」では以下の内容で授業を実施している。

4. 応用可能な「スキル」「型」「ストラテジー」を身につける意義

「日本語専門基礎 AI」では、アカデミック・ライティングを学ぶ。教師チームで開発したオリジナルテキストを使い、スモールステップで学べるようにコースを組み立てている。学生はまず、書くスキルとして基本的な文体や表現、文法を学び、次にパラグラフライティングの型を学び、それから情報を得る技能、資料を引用・要約するスキルを学ぶ。

そして最後に、学習した内容を統合して実際にレポートを書く。

「日本語専門基礎 AI」で学ぶパラグラフのうち、例えば「意見のパラグラフ」では、図1のようなパラグラフの流れとしての「型」と、「～べきである」「なぜなら～からである」といった意見や理由の表現を学ぶ。この学習でもっとも

重要なのは、パラグラフの流れをつなぐ論理に気づき、それを自分で組み立てられるようになる力の養成である。また、「型」は、内容を変えれば他のパラグラフでもほぼ同じであり、さらにリアクションペーパー、口頭発表、レポートなど、様々なところにも応用可能である。

「日本語専門基礎 AII」では、学群で授業を受ける際に留学生が直面する日本語の問題を解決することを目的として、書くこと以外のスキルとストラテジーを中心に学ぶ。論説文を読むための読解のストラテジー、ニュースを聞くための聴解のストラテジー、聞いたニュースや新聞記事について意見の交換をするための口頭発表のスキル、講義の構造と内容を理解してノートを取りリアクションペーパーを書くスキルを学ぶ。さらに、大学での勉学に必要な文法と専門的な文章や新聞記事の中の語彙を身につける。

基本的な文体や表現、文法、語彙といった日本語知識の獲得と同様に重視しているのは、対象となる素材を問わず応用可能な「スキル」「型」「ストラテジー」である。例えば、

前述の「講義が聞き取れない」

という問題に対し、「日本語専門基礎 A II」では、講義聴解のストラテジーを身につけることで解決を目指す。講義が聴けない理由のひとつに、講義の構造がわからないことがあると言われるが、その解決のために、図2のように「談話マーカ―」を利用して講義の構造を理解するストラテジーを学ぶ。

このように、「日本語専門基礎 AI、AII」では、実質的な日

導入文

主題文 <意見>

支持文① <理由>

支持文② <論拠・証拠>

まとめ文

図1 意見のパラグラフ

(教材作成は授業担当者チーム)

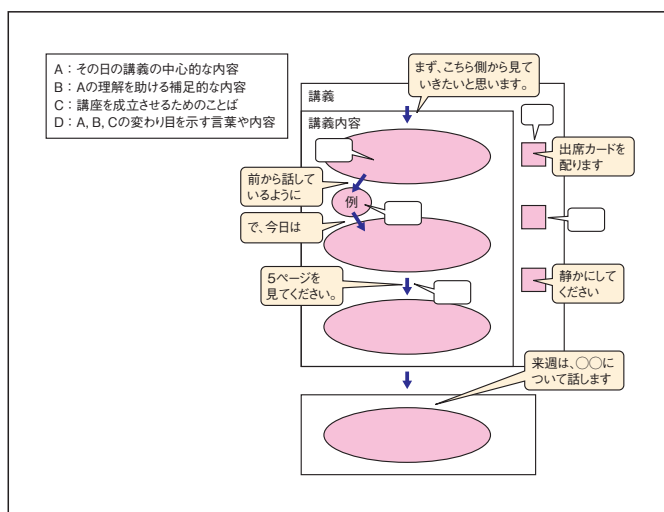


図2 講義の構造理解のための練習シート

齋藤 (2013) より転載 (教材作成は授業担当者チーム)

本語の知識とともに応用可能な「スキル」「型」「ストラテジー」を学び、使う練習をすることによって、学生が早く、効率的にCALPを身につけることを目指す。また、「日本語専門基礎B」においては、個別の弱点強化を中心に、個別の学習アドバイジングと個別指導を行っている。そこでも、対症療法的な日本語の補完に終わることなく、自分に合った学習方法の発見や動機づけにかかわる気づきを促進するよう心掛けている。

5. 学生の多様化

ここ数年、学群留学生の日本語力が落ちているという声を、日本語科目担当者からしばしば聞く。同じ担当者がほぼ同じ学習項目を授業で扱い、ほぼ同じレベルの試験を行ったにもかかわらず、前年度より不合格者が多く出る状況が数年続いている。

学群留学生は、毎年入学時にクラス分けのためのレベル判定テストを受けているが、同等レベルのテストを受けた結果、2010年度には最低点が112点であったのに対し、2015年度には72点であった。また、下位層の学生の得点は、RJ交換留学生の中級前半と同レベルであり、本人に聞くと大学入学前には初級テキストしか勉強したことがないというケースもある。大学で必要とされる日本語レベルはいわゆる「上級」であるが、初級修了レベルの日本語学習者が上級レベルに達するためには、さらに300～400時間の日本語学習が必要であると言われている。大学入学後に、専門の勉強をしながらそれだけの日本語学習時間を確保することは困難である。

「日本語専門基礎」は1年次の学群留学生のコア科目であり、大学生として勉学をするために必要な日本語(CALP)を獲得するために開設されている。科目の到達目標が明確であるため、合格基準を落とすことはできないというのが、これまでのプログラムとしての考え方であったが、「日本語専門基礎」の授業を理解することすら困難な学群留学生や、日本語力ばかりではなく動機付けや基礎学力に問題のある学生が増えている現在、学生のレベルに応じた内容の見直しが必要である。

その一環として、「日本語専門基礎B」においては、学習者自ら自己分析、目標設定を行い学習計画を立てる本来の内容に加え、2015年度よりリメディアル的な日本語学習を教師主導で個別に進めていくことにした。また、勉強の仕方や授業の受け方についても、個別の指導を行っている。しかし、4年間という限られた時間の中で効果を上げるには、より集中的な学習支援が必要とされる。

6. 学習支援

上でみてきたように、「日本語専門基礎」は大学生に求められる総合的な日本語力およびアカデミックスキルを身につけることを目的とし、入学者の日本語力低下などの多様化への対応を試みているが、その他にも日本語プログラムにおいては、日本語の特定の知識、スキルを強化する「日本語演習」を選択科目として開講し、学群留学生のニーズに応えるよう努めている。約30科目の「日本語演習」のうち、26科目は学群留学生も履修している中級または上級レベルである。特に「職業コミュニケーション」や「地理と歴史の用語」などは、短期交換留学生も対象としてはいるが、学群科目で日本人と共に学び、日本に長期滞在する学群留学生のニーズを強く意識してコースデザインされたものである。前者は日本で就職活動をし、日本企業に就職するために必要な日本語力やビジネスマナー、ビジネス知識やコミュニケーション力を身につけることを目的とし、後者は日本語でコミュニケーションをする際に必要となる背景知識を身につけ、日本社会に対する理解を深めると同時に、日本社会の出来事や問題に持続的に関心を持つことができるようになることをも目指している。

また、必修の日本語科目は入学後1年目の計10コマであるため、2年次以降も継続的に日本力を伸ばしていけるよう、2学期目終了時に「2年生になっても日本語を勉強しよう！」というスローガンの入った「日本語演習」科目一覧を配布し、翌学期の選択科目の履修登録を呼びかけている。毎学期、「日本語演習」科目に、多くの2年生以上の学群留学生および日本語を第一言語としない学生が登録して日本語学習を継続しているが、特に学習者自身が自分の日本語力とニーズを分析し、計画を立てて学習を進めていく「チュートリアル」では数多くの学群生が学んでいる。滞日年数、学習背景、日本語力の特徴など、多くの点で多様な学習者に継続して適切な助言を与えるには、大学入学時からどのような日本語学習を経てきているかを把握している日本語プログラム教員の専門性が重要である。

以上は日本語授業を通じた実践であるが、基盤教育院(日本語プログラム)は、外国語学習施設におけるリソースの提供という形でも日本語学習を支援している。具体的には日本語学習リソースセンター(The Center for Japanese Learning Resources: CJL)とライティング・サポートセンター(Writing Support Center: WSC)である。前者は留学生等日本語を母語としない学生のための様々な学習リソースを提供している自主的な学びの場であり、後者は外国語としての英語および日本語を書くスキル向上のため、「自律的な書き手を育てる」という方針の下、2013年度より基盤教育院外国語教育部門が運営しているものである。これらの施設の積極的な活用を、日本語授業その他を通して学生に勧めている(詳細は齋藤・池田・ミグリアーチ 2014 を参照のこと)。

7. 全学共通の日本語プログラムの必要性

学群留学生の日本語力を早く、効率よく上げるためには、その内容を学群での学習内容に合わせたものにすることが望まれる。たとえば学群や専攻、科目によって、講義理解のために必要な専門用語はもちろん、求められる課題の内容、スタイルなどにも違いがある。合わせて重視しなくてはならないのは、前述の日本語による学習言語能力 CALP の獲得である。CALP の獲得には、第一言語で学んだ内容や獲得した能力も大きくかわり、第一言語での CALP が確立していない場合には、第二言語での CALP の獲得は非常に困難だと言われている。このように複雑な言語能力の問題を正しく判定し適切に対処するためには、言語教育の専門的チームによる実践研究とカリキュラム開発が必須である。全学共通のプログラムを基盤として、運用面でそれに学群ごとのニーズを加える現在の体制が適当である。

学生の立場から見ても、全学共通の日本語プログラムによる授業を受ける意義は大きい。例えば、留学生の少ない学群における留学生のネットワーク作りに日本語授業が貢献している。また、前述の共通の学習支援システムは、どれも学群ごとでは運営は困難である。

さらに、この数年は日本語面での困難を抱える編入留学生の増加に伴い、履修計画・指導の段階から学群の教員と日本語教員が連携して支援をすることの重要性が関係者間で認識されている。新入留学生の日本語レベル判定テストは、「日本語専門基礎」の履修が必須ではない編入留学生や、「留学生」ではないが日本語が第一言語ではない学生も受験するよう呼びかけているが、日本語能力に起因する学習上の困難が見過ごされがちなこれらの学生を支援する上で、日本語プログラムは一定の役割を果たしてきたと考えられる。また、編入留学生にとどまらず、新入学群留学生、留学生以外の日本語非母語学群生、さらに RJ (交換) 留学生や桜美林高校への留学生にいたるまで、全学における日本語教育のニーズを横断的に把握し、支援を行う日本語プログラムあるいはそれに相当する組織の存否は、本学におけるすべての学びの質を左右するものと言えよう。

各学群における基礎教育のあり方についての議論に際しては、これまで基盤教育院の各プログラムが行ってきた教育実践に関する正確な情報が必須であることは言うまでもない。日本語教育に関しても、今までの蓄積を活かしつつ留学生の質量などの変化に応じた教育・学習支援が行える、全学を対象とした共通プログラムが今後も維持されることを望む。

留学生のみならず、日本語を母語とする学生たちの CALP の獲得も考慮して、第一言語、第二言語を問わない CALP 獲得のための全学日本語プログラムを実施している大学があるが、むしろ、このような全学プログラム実施の体制作りが本学でも検討されることが、急務であると考えられる。

参考文献

齋藤伸子 (2013)「日本語専門基礎」『OBIRIN TODAY』13号 pp. 53-58

齋藤伸子・池田智子・ミグリアーチ慶子 (2014)「日本語プログラムによる日本語学習支援」『OBIRIN TODAY』14号 pp. 13-28

Cummins, J. (1984). *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Clevedon: Multilingual Matters.

- i 日本語プログラムはいわゆる「留学生」のみならず、日本語を母語としない様々な背景の学生の日本語学習支援の役割を担っている。
- ii 学生の日本語レベルはプレイスメントテストによって決める。レベルとしてはVIまでであるが、科目はVまでとし、VIレベルと認定された学生は必修の日本語クラスを持たない。VIレベルの学生の多くは、学群の専門科目等日本人学生向けの科目や日本語演習のみを履修する。